

宗教心理学研究会ニューズレター

第23号 2015.9.20

宗教心理学研究会

Society for the study of psychology of religion

目次

特集: 科研費研究プロジェクトの3年間の活動を終えて	-----	1
率直な思いと今後に向けて	-----	相澤秀生 2
科研費研究プロジェクトの3年間の活動を終えて	-----	浦田 悠 3
災害と研究	-----	大村哲夫 4
科研費研究プロジェクトの3年間の活動を終えてー話しかける宗教ー	-----	ミカエル・カルマノ 5
3年間の活動を支えてくれたもの	-----	具志堅伸隆 8
科研費研究プロジェクトに参加しての感想	-----	小林正樹 9
非常に濃い学びと成長の日々をふり返って	-----	酒井克也 10
プロジェクトでのご縁と私の学び	-----	武田正文 12
様々な宗教集団を比較することの大切さ	-----	徳野崇行 13
科研費研究プロジェクトの3年間の活動を終えてー失敗からの「学び」と「成長」ー	---	中尾将大 14
感謝のひとつ	-----	西脇 良 15
事務局からのお知らせ	-----	17

特集: 科研費研究プロジェクトの 3 年間の活動を終えて

2012 年度～ 2014 年度にかけて、科研費研究プロジェクト「宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連ー苦難への対処に関する実証的研究ー」(2012 年度科学研究費補助金, 研究分野: 社会心理学, 研究種目: 基盤研究(B), 研究代表者: 松島公望, 課題番号: 24330185)が行われました。

実証的宗教心理学的研究(科学的心理学)の分野でこれだけの規模の大きなプロジェクト活動(科学研究費補助金の配分額: 直接経費+間接経費を合わせて 1,820 万円)はこれまでなかったと思います。科研費研究プロジェクトの研究成果は「研究成果報告書」としてまとめましたが、その中ではプロジェクトメンバーの思いについては触れることはできませんでした。

この先、様々な要素がかみ合い、新たな連携・協働が生まれ、今回のような規模、もしくはそれ以上のプロジェクトを行うことになった場合、今回の研究プロジェクトの経験は大きな財産になると思いました。そのことから、この 3 年間の活動を通して、感じたこと、考えたこと、経験したことをプロジェクトメンバーに率直に執筆してもらい、それらを研究会ニューズレターとして刊行し、記録として残すことにより、これからの宗教心理学的研究の発展に寄与したいと考えました。

今回の特集を通して、さらに宗教心理学の可能性が広がっていくことを願うばかりです。

率直な思いと今後に向けて

相澤秀生(跡見学園女子大学:非会員)

まずはきわめてプライベートな話から始めることをお許しいただきたい。科研費研究プロジェクトの代表者である松島公望氏との邂逅は、約 10 年前に実施された曹洞宗宗勢総合調査においてである。当時の私自身の研究関心といえば、戦国時代における人びとと宗教との関わり、現代の過疎地域における寺院の実態といった具合で、プロジェクトが研究目的に掲げる「宗教性／スピリチュアリティと精神的健康との関連」とは、おおよそ交差することのないものだった。

しかし曹洞宗宗勢総合調査に引き続き行なわれた檀信徒意識調査において、松島氏とともに質問紙の作成から調査結果の分析・報告に携わるなかで、檀信徒と菩提寺の結びつきは死者の供養にあり、教団への信仰には結実していないという、これまで宗教学で繰り返し指摘されてきた実態が改めて浮き彫りとなり、檀信徒ひいては現代社会の人びとにおける信仰や宗教性とは一体何なのか、研究関心を広げる良縁に恵まれた。松島氏からプロジェクトの数量的研究班の研究協力者として参画してほしいとの打診があったのは、折しもそのような頃だった。研究関心はともかく、宗教心理学といえば、W.ジェイムズ、S.フロイト、C.G.ユングら、宗教学の初歩的な教科書に登場する人名と、そのごく簡単な研究紹介程度の知識しか持ち合わせない私自身が、はたしてどこまでプロジェクトに貢献できるかはわからなかった。そうしたためらいのなかで、微力ながら何かお力添えするところがあればと、一抹の不安を抱えながら打診をお引き受けしたことを今でも鮮明に記憶している。

私がこのプロジェクトで主に関わったのは、調査フィールドの提供という部分を除けば、質問紙の属性項目の立案・作成だった。しかしそれも父の死や当時の所属先の任期が災いし、会議やメールでの議論も「点」での関わりを余儀なくされた。回収した質問紙のエラーチェックでも、全くと言っていいほど、お役立ちできなかった。結果的にみれば、プロジェクトに名を連ねただけで、松

島氏をはじめとするプロジェクトメンバーには、多大なご迷惑をお掛けしたというのが率直なところである。平身低頭、お詫びするよりほかない。

かくして、プロジェクトには帯で関わることはできなかったが、それでも宗教心理学を専門とする多彩なプロジェクトメンバーとの交流、また私自身の体験や経験を通して感じたことは、身近な人との死別体験、その後に行なわれる葬儀や法事といった供養の実践が、「宗教」なるものへの意識や態度、行動などを大きく変化させるということだった。この世に何らかの未練を残していったであろう故人に、せめてその慰めになればと、思いの供養を施す。それは一方で、死者のことに思い煩うことなく、死後の一切は永遠不変の神の意思や万物の理法にすべて委ねよと説く、普遍主義的な宗教の救済理念と皮肉にも乖離していく。檀信徒意識調査で直面した現実は図らずもまた、このプロジェクトに関わるなかで思いを深めた格好である。

そうした経験をもとに、プロジェクトの研究成果報告書では、「信仰の有無と信仰継承」「寺檀関係の信仰」を執筆する機会をありがたくも頂戴した。いずれも「信仰」を問題としている。いうまでもなく、信仰の意味づけは各宗教によって異なり、また人によっても考え方の相違がある。そのように多義性を帯びた信仰について、その有無を質問紙で平板化して問うこと自体に一体何の意味があるのか、そもそも比較は可能なのかといった批判は当然ありうる。だが、それが無意味かといえば、決してそうではなからう。現代社会の人びとの信仰や宗教性のありようを浮かびあがらせる可能性はゼロではないはずである。例えば、探索的な分析となるが、このプロジェクトの質問紙調査を通して、信仰を持つ人と持たない人の群に分け、その意識と行動の特徴を把握することによって、被調査者本人が思い描いているであろう信仰の輪郭を、一般化していくことも可能であると考える。そうすることによって、これまで信仰とは切り離されて考えられてきた供養という実践(あ

るいは別の側面)が、じつは信仰と密接なつながりをもっていたということになるのかもしれない。これについては、研究課題の一つとして、今後取

り組んでいく所存である。全く罪滅ぼしにもならないのだが。

科研費研究プロジェクトの 3 年間の活動を終えて

浦田 悠(大阪大学)

まずは、この度、3 年間に亘る科研プロジェクトへ参加させていただいたことに深く感謝を申し上げます。おかげさまで、今回の実り多いプロジェクトを通して私自身も様々な貴重な学びを得ることができました。

このプロジェクトでは、私は質的研究班のメンバーとして参与させていただき、班長の川島大輔先生、武田正文先生、大村哲夫先生とともに、災害による喪失と宗教の関わりをテーマとして、東北や神戸でのフィールドワークや文献研究を進めてきました。

文献研究では、災害と宗教による喪失について、現在までにどのようなことが明らかになっているのかについてレビューしました。先行知見では、①予測やコントロールができない被災経験が神への帰属を高めること、②宗教的な信仰を事前に持っていることが、災害へのオプティミズムや人生の目的の感覚を予測すること、③その一方で、ネガティブな宗教コーピングが精神的苦痛や PTSD と関連していることなど見出されていました。また、いまだに宗教性／スピリチュアリティの定義自体が研究者によって異なることや、災害による喪失の意味づけに関する質的な研究が少ないことなどもわかってきました。

それらの先行知見も踏まえつつ、質的研究班では、「宗教／スピリチュアリティと宗教者、そして遺された者との関わり合いは、成長や後悔、自責の念や怒りなどが複雑に交差する多声的なものである」という視点を持ってフィールドワークを行いました。具体的には、東北でフィールドワークや専門家へのヒアリングを行った後、神戸で阪神大震災に関連する慰霊モニュメントへのフィールドワークおよび、慰霊法要関係者(主催者・参加者)へのインタビュー調査等を実施しました。イ

ンタビュー調査からは、やはり災害→宗教儀礼→喪失後の適応という単線的な因果図式に回収されないような重層的な様相が明らかになってきました。1 月 17 日の慰霊法要には震災から 20 年を経た今も多くの人が集まりますが、その法要を通じてあの震災をどのように受け止めているか、そして喪った人といかなるつながりを保ち続けているかは、人によって、時によって、また法要への関わり方によって多様であり、一人一人の語りの中でも揺らぎが見られました。

このように、フィールドワークを通して宗教性／スピリチュアリティに関わる現場に赴き、空気のように自然な形で存在する宗教性や、不条理に思える逆境の中で真剣に希求される宗教性などを実際に肌で感じる事ができたことは、プロジェクトの研究成果としても新たなものであったことはもちろん、私自身がこれまで漠然と抱いていた宗教性／スピリチュアリティのとらえ方を大きく変える経験でもありました。明示的に宗教的な意味づけがなされることももちろんありますが、宗教的ケア・スピリチュアルケアとは言わず、双方が意識していないものの、宗教儀礼や宗教的信念にどこかで裏付けられたケアがなされていることもありました。さらには宗教の提供する物語を迂回しつつ意味の再構成がなされる語りも見られましたが、それもある意味では宗教性／スピリチュアリティをめぐる語りといえるのかもしれませんが。これらの語りをきく中で、研究者として、また一人の人間として、喪失の語りに向き合うことの重さや難しさを改めて痛感しました。

私事ですが、私も昨夏に父親を突然亡くし、大きな喪失を経験しました。通夜の朝、私が運転する父の車のフロントガラスに、車が動き出してもいつまでも飛び立とうとしない蝶が一匹いました。

その時、至極自然に「この蝶は父かもしれない」と考えている自分に気づいたとき、まさにこれが宗教性／スピリチュアリティの源泉ではないかと思いました。自分の中で、そして周囲の人に、このような喪失の物語をくり返し語りなおしていく中で、人は癒やされることもあれば、いつまでも語り得ない物語とともに生き続けることもあるでしょう。それを丁寧に取り上げていくような研究を今後もしていきたいと思っています。

この科研は、数量的アプローチと質的アプロー

チの双方から、日本人の宗教性／スピリチュアリティを考えるという、非常に大きなテーマを掲げたプロジェクトでしたが、今後は、このプロジェクトでなされてきた様々なアプローチをどのように 21 世紀の日本の宗教心理学としてまとめあげていくのか、というフェーズに入っていくのではないかと思います。宗教心理学の今後の発展を願いつつ、この科研でご縁をいただいた先生方に改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

災害と研究

大村哲夫(東北大学)

研究会ニューズレターということで公式の論文などでは書けないことを書きたい。

前回の研究会ニューズレターでも書いたことだが、被災者を対象とする研究をすることに忸怩たる思いを禁じ得ない。私の担当した東北を対象とした質的研究について、様々な葛藤があったし、今もそれは続いている。

本科研がスタートした時、私は仙台で東日本大震災に遭遇していた。阪神淡路大震災でも災害派遣を受けて避難所の運営に当たった経験があったが、今回は自分自身も「被災者」となり、応急仮設住宅に入居しながら細々と支援活動をするという立場であった。

震災直後から私の元へ、電話やメールで安否を問うと共に、被災地の調査や支援に入りたいという要望が寄せられた。この頃は被災地同士より東京などからの方が連絡がつながりやすかったのである。しかし被災地では宿泊場所、食料や燃料が圧倒的に不足しており、供給がいつになるか分からないため、自立していない「支援」の来訪は却って迷惑であった。また身近な人の安否も分からない状態の被災者に「心のケア」を提供しようとする援助も、時期尚早であった。自らの感情を遮断することで自分自身を防衛している被災者に対して、「こころのケア」と称して傷を語らせようとする取り組みなどは絶対に止めてほしかった。原子力発電所の「事故」についても、被災者

をはじめ国民には正確な情報が開示されず不安の中で放射線に晒されている中、仙台在住の外国人たちは本国の手配した手段で、迅速に避難し帰国していった。北米やヨーロッパだけでなく、中国やインドネシアなどアジアの国々の対応も自国民保護という点で見事なものであった。

こうした状況の中で、「今すぐ行く!」という研究者や支援者に、被災地訪問をしばらく控えてもらうように婉曲に返事をしたのだが、「止むにやまれず」無理矢理来訪する人もあった。支援とは一体誰のためなのか、私には彼ら自身の存在価値を確認するために、被災者を支援しようとするように見えた。

震災後 4 年を経て、なおこのような事を綴っている自分の感情に驚かされるが、「東京オリンピック」のために資材・人材・資金が不足し被災地の復興が進まず、その「遅れ」は被災自治体の負担額の増加という状況が起きている。仮設住宅の再延長はなく、退去が求められているが、復興住宅はまだ必要量が建設されていない。運良く復興住宅に入居できた人も家賃負担とコミュニティの喪失、不便な立地などの問題を抱えている。原子力発電所の再稼働は進められ、被災地では毎日地域ごとの放射線量がラジオで流されているものの、日本というレベルでは、事故の事実は過去の例外として忘れ去られてしまったようだ。津浪のあった沿岸部は瓦礫が撤去されたが、茫

茫とした更地となり、ダンパーが行き交うものの整備が終わった頃には住む人は戻ってこない。などなどの現状を目の当たりにすれば、震災は現在進行形なのである。

研究とはいったい誰のためなのか。被災者の

気持ちを感じとり、被災者に貢献できるものなのか、そうした問いはまず第一に自分自身に向けられるものであることを肝に銘じ、考え続けていきたい。

科研費研究プロジェクトの 3 年間の活動を終えて — 話しかける宗教 —

ミカエル・カルマノ(南山大学)

"What we observe is not nature herself, but nature exposed to our method of questioning."

(ヴェルナー・カール・ハイゼンベルク (Werner Karl Heisenberg), ドイツの理論物理学者)

宗教を見る観点

学術雑誌で調査結果を発表するとき、その調査を金銭的に援助した企業や団体の名称が明記されるのは、研究者とスポンサーの利益相反行為 (conflict of interest) を防ぐための常識である。公教育のカリキュラムを専門分野とする著者が特に興味を持っているのは学校教育の大幅な教育改革であるが、教育改革を取り上げる報告書にそれを主催・共催する大きな経済界の団体や財団の名称を見ると、半自動的に「要注意」という文字が頭に浮かんでくる。何故ならば、国の国際的な競争力の低下を懸念する企業(そして政府関係者)が学校教育に求める対策は、教育が目指すべき目標を必要以上に狭める危険があると著者は危惧しているからである。今回の科研費研究プロジェクトの「スポンサー」となったのは文部科学省であり、宗教性やスピリチュアリティは現代社会に於いて十分に研究する価値があると認めていただいたことは、著者にとって非常に喜ばしいことである。そして、研究プロジェクトの趣旨に影響を与え、場合によって競合する可能性があるのは直接的に研究活動に参加しない

第三者のスポンサーだけではない。研究者自身の価値観も無視できない要因の一つとなっているのである。したがって、ここで先ず著者が持っている「宗教を見る観点」についての自己開示が必要であろう。

カトリック教会の聖職者を兼ねて大学で教育研究活動を続けてきた著者にとって「宗教」は(科学的な手段を使う)研究の対象であると、同時に自分と、そして教えている学生にとって「話しかける宗教」である。宗教の歴史的・文化的な現象に関する情報を伝達する教育活動は知識の伝達に止まらないで、個人に対するある種の「問いかけ」でもある。文学、芸術、そして自然科学にも見られる現象であるが、対象との距離を保ちながらそれを客観的に見ようとする姿勢に対して、別な形での個人的な関わりを求めているのは、宗教の特徴であるかもしれない。いうまでもなく、ミッション系の大学で教鞭を執っている著者にとって都合が良い側面がある。授業科目、そして公式的な行事を手段に、著者は宗教について教えているが、私から宗教について学ぶ学生は、同時に、宗教からも学ぶのである。学生が書いた授業評価や感想文はこの「学び」の興味深い具体例となる。

英語で行われた授業、"Religious Foundations of Education"^{*1}を受講したあるカトリック信者の学生は次のようなコメントを書いた。"I'm interested in religion and education

*1 全学年・全学部を対象とする共通教育の国際科目群。各国の政策を紹介しながら、宗教と公教育の接点を検討する。

especially in Japan. In the first day of class, you asked us "what is religion?" and I was surprised that I couldn't answer easily. I thought I have my own definition about religion but your question woke me up. I have to think more about religion." キリスト信者にとっても宗教は、答えを与える前、先ず質問、問題提起となる。似たような反応は信者でない学生からも得られた。1 年生全員を対象とする講演「カトリック大学の精神とは何か」を受講したある学生はこう書いた。「南山の入学式で急に聖歌を歌い出したので驚いたのを今でも覚えています。聖歌を聞くことは初めて、正直、変な間違っただけの世界に入ってしまったのではないかと思ってしまいました。しかし、南山大学はカトリック大学であることを思い直し、また今宗教学を学んでいますが、宗教は決してあやしいものではなく自分を磨くことのできるものだと改めて思いました。」

同じ講演で紹介した具体例(映画「炎のランナー」^{*2})は受け入れがたいと言いながらそのメッセージを評価する感想もあった。「オリンピックに出場するためにランナーはものすごく努力してトレーニングや練習をしてきたと思うけれど、宗教的に日曜日だったからオリンピックに出場しなかった。それほど大切なものだとよく分かった。私だったら絶対オリンピックに出ます。宗教を深く信仰していない私にとってはすごく驚いた。」

言うまでもなく、「話しかける宗教」に無関心な学生もいる。感想を求められて「興味を持ってなかったトピックだったので思いつきません。」という学生もいれば、「寝てしまったからわかりません。」という正直なコメントもあった。

アンケート調査の可能性

今回の科研費研究プロジェクト、特にアンケー

トの質問紙の作成と分析に参加したことを振り返って、大学院の時に履修した教育的研究方法論の授業を思い出した。使っていた教科書^{*3}はデータの収集と分析とを幅広く取り上げたが、カリキュラム研究を専攻した著者にとって特に興味があった例は二つの教え方(treatment)の違いを検証する実験のデザインであった。それは哲学や思想を重視してきた著者にとって発見が多い別世界に接する経験となった。言われて直ぐに当然だと納得したが、実験を実施する時間帯に注意しなければならない。何故かという、実験を実施している間に外的要因が結果に影響を及ぼす可能性があり、比較するグループの同時進行は必須の条件とされているのである。

宗教観やスピリチュアリティの現象を対象とするアンケート調査においてもこのような外部要因の影響が考えられる。例えば社会で注目されている(イスラム過激派で殺された日本人のような)事件が調査の時期に起こった場合、宗教に対するネガティブな見方が増えることは十分に考えられる。今回は実施する時期は対象となるグループによって多少違ってきたが、これは問題にならなかった気がする。しかし、著者が研究成果報告書にも書いたように^{*4}、振り返ってみて、アンケートそのものが回答者に影響を与え、宗教についての考え方を変える可能性は否定できない。「アンケートをやって宗教について考えさせられて、ありがとうございます。」というコメントは裏付けとなるであろう。

「話しかける宗教」と言う宗教観をもってこの研究プロジェクトに参加した著者にとって、前に紹介した学生の反応と同じように、このような反応は新たなチャレンジとなる。統計的な手法を使って、個別の反応を標準化されたスケールに載せて法則性を見つけようとするのは(一般化を目指

*2 Chariots of Fire, 1981. 1924 年のパリ・オリンピックで出場したイギリス選手の実話に基づく映画。

*3 L. R. Gay, Educational Research: Competencies for Analysis and Application. Charles E. Merrill Publishing Company, 1976

*4 学校現場と宗教—中高生におけるスピリチュアル現象とキリスト教的宗教意識は何を語るか—。科学研究費補助金 基盤研究(B), 宗教性/スピリチュアリティと精神的健康の関連—苦難への対処に関する実証的研究— [2012 年度~2014 年度 研究課題番号: 24330185], 研究成果報告書, p.84。2015 年 3 月 7 日 発行。編集・発行者 松島公望

す)心理学の使命であろうが、考えてみれば、このようなアンケートで得られた回答は回答者が既に持っている意見(見方)だけではなく、アンケートの質問に対する反応も少し含まれている可能性がある。これこそ最初に引用した Heisenberg の言葉が指摘していることである。研究対象は自然であっても、把握できるのは我々の設問の影響を受けた自然だけである。生きた人間を対象とするアンケート調査ではなおさらのことであろう。アンケート調査で測ることができたのは「宗教性・スピリチュアリティに対する考え」そのものだけではなく、アンケートを通して「話しかける宗教」を経験し、その「話しかける宗教」によって呼び起こされた、今までなかった宗教に対する反応(場合によって反発)も含まれていたのである。

ところで、著者はこのような状況を決して(外部要因による)欠陥だと思っていない。むしろ、アンケート調査の一つの可能性を示しているとしている。実は、ミッション系の大学が必修科目として位置づけている宗教の授業との共通点があるように思われる。これらの授業の狙いは特定の宗教の正しさについて学生を納得させることではなく、「宗教」を(興味があるかないかに関係なし)取り組むべき、考えるべき内容として位置づけて、学生に提供することである^{*5}。

宗教との関わり方に見える変化

表面的に見れば、今回のアンケート調査はある時期の特定の団体に属する人の考えを突き止めて、回答を集計した結果、それなりの明確な答えが得られた。しかし、著者が感じたのはこの結果が示す事実や、平均点が示す固定した全体像だけではなく、人は何かに触れたときその宗教・スピリチュアリティとの関わり方に変化が見られる、ということである。自由記述で述べられたスピリチュアルな経験のほかに、宗教・スピリチュアリティに関するアンケートに答えたこともこのよう

な(宗教について考える)プロセスの開始のきっかけとなり得る。公開された世論調査の結果はまた世論に影響を及ぼすことはあるが、人の信仰・信念に関するアンケートであれば、質問へ答えること自体はこのままである種のフィードバックになる気がする。

宗教について考えさせる要因には、だいぶ前から大きな変化が見られると思われる。人を宗教について考えさせて、反応を呼び起こす代表的な要因は、依然として社会的な役割を担っている従来の宗教団体(教会)ではあるが、この呼びかけに対する応えを求めて、多くの人は教会の伝統的な教義と典礼を離れた(総合的にスピリチュアリズムとも言える)現象に目を向けているようである。問題視される宗教団体(教会)は宗教について考えさせるきっかけとなっているが、現代人はその答えを個人的なスピリチュアリティに求めているのである。つまり、現代人が宗教について何を考えているのか、何を信じているのかを知るために、教会の教義を調べるだけでは答えにはならない。この観点から宗教との関わり方を研究した二つの書物を紹介して、このエッセーを終わる。

宗教と個人が持っている信仰

最初の著書は人が実際生活で実施している宗教性(スピリチュアリティ)と従来宗教を代表してきた教会との関係を検討している^{*6}。ケーススタディーの形で、巡礼旅行の人気、パリをはじめ、他の都市でも問題となっている"Love Locks"(「愛の南京錠」)、そして動物墓場の需要等を具体例として取り上げて、教会離れが進んでいる状況で人がどのような形で宗教との関わりを保っているかを描いている。教会の伝統的な行事から離れていても、「宗教は別な形で「生きている宗教」となっている」、とこの著書のサブタイトルも表明しているが、このような「宗教」には三つの特徴

^{*5} 換言すれば、「話しかける宗教」の影響を受けつつ、宗教を代表する人物として教育活動を続けてきた著者であるからこそ、(キリスト教の細かい教義に拘らない)「必修科目」という手段を使って、学生にもこのような継続的な取り組みを促そうとしている。

^{*6} Lutterbach, Hubertus, Vom Jakobsweg zum Tierfriedhof: Wo Religion heute lebendig ist. Butzon & Bercker, 2014.

がある、と言われている。明らかな個人志向 (Individualität) をベースに自分なりの包括的な一致 (Ganzheitlichkeit) を目指しているが、このような活動は組織・制度から切り離されて (Institutionsferne) 行われているのである。神は死んだ、宗教は消えると言われている時代において、宗教は別な形で生き続けているというのが、この著書で強調されているポイントである^{*7}。

もう一つの著書^{*8}は何カ国が^{*9}の近代化における宗教の在り方を比較する研究である。近代化と並行的に進んでいる世俗化は宗教との関わ

りを弱めている一方で、別な形で宗教との繋がりを強化することも考えられる。例えば、個人主義は確かに宗教 (団体) との関わりを弱めているが、個人的な信仰を強化することにも繋がるそうである。近代化・世俗化がもたらす変化は宗教にどのような影響を与えるかは、一つのモデルだけでは説明できないということが、この著書から得られる一つの結論であろう。

社会の変化の最中で、形を変えながら、話しかける宗教との繋がりを保ち続ける現代人—このような変化を把握する研究を今後も続けたい。

3 年間の活動を支えてくれたもの

具志堅伸隆 (東亜大学)

3 年にわたる科研費研究プロジェクト「宗教性 / スピリチュアリティと精神的健康の関連—苦難への対処に関する実証的研究—」が今年 3 月 7 日の研究成果公開シンポジウムをもって終了しました。基盤研究 (B) という科研の規模、研究代表者の松島さんをはじめ、研究分担者、連携協力者、研究協力者、総勢 18 名からなる大変大きなメンバー構成、直接経費と間接経費併せて 1,820 万円という多額の予算等々、私がこれまでに経験したことのないレベルの活動でした。規模が大きく、目標も高いがゆえに、活動では決して平坦な道のりではなく、様々な困難な状況も発生しました。シンポジウムに合わせて公開された研究成果報告書の中で松島さんは、「一歩進むごとに壁にぶつかり、前に進めないといった状況もあった。多くのメンバーが『もうこれ以上は進めない』と思わざるを得ない状況もあった。そのような多くの困難な状況を経ながらも、それぞれの班、チームがぎりぎりのところで踏ん張り、その活動を遂行し続け、この 3 年間の活動を全うするに至

ったのである」と書いておられますが、まさにそのような展開だったと思います。

困難な状況に直面したとき、人は「なんのためにこれをするのか？」という問いかけを自分自身に対して行うこととなります。そして、その問いに対して積極的な答えを見だし、困難な状況を肯定的に意味づけることができたとき、「困難を乗り越えて前進しよう」という意欲が生まれます。今回のプロジェクトでは、メンバーの方々それぞれが、様々な形で多かれ少なかれ、このプロセスを経験されたのではないかと思います。私もそうでした。

まず挙げられるのは、当然のことなのですが、このプロジェクトが国民の貴重な税金に支えられたものであり、その一員として恩恵を受けている以上、プロジェクト成功のために最大限の努力を投入する義務があるという思いです。プロジェクトでは調査の打ち合わせやエラーチェック作業、あるいは学会発表のため、頻繁に出張する機会がありました。私は山口県下関市からの移動に

*7 著者が多少の違和感を覚えたのは、p.286 で「千の風になって」という歌の歌詞を現代人特有の「死を否定する」発想として位置づけている主張であった。

*8 Detlef Pollack & Gergely Rosta, Religion in der Moderne: Ein internationaler Vergleich (Centrum für Religion und Moderne, Bd.1), Campus Verlag, 2015.

*9 ヨーロッパの各国のほかにはブラジル、アメリカ合衆国と韓国も対象となる。

なるため、常に飛行機や新幹線を使つての遠距離移動や現地での宿泊が必要でした。そのつど発生する高額の旅費を科研費で精算する度に、「これに見合った働きをしなければ」という思いを新たにしたのでした。思い出深い出張はいくつもありますが、費用と移動距離という点で言えば、2013 年 9 月に北海道まで出かけた日本心理学会第 77 会大会でのシンポジウムが最も強く印象に残っています。飛行機を乗り継いで、10 万円近い旅費を出しての学会発表というのは、なかなかできることではありません。科研費のプロジェクトで研究できることの有り難さを痛切に感じ、コミットメントの気持ちを一層強めることとなった象徴的なイベントでした。

また、共同研究であること、その中での人間関係も重要な要素でした。このプロジェクトが始まるまで、私は指導教員から指導を頂きながら行った学位論文の研究以降は、もっぱら単独で研究を行ってきました。自分のアイデアや考え、興味だ

けに基づいて自由にやれるという気持ちはありませんでしたが、関心を共有する仲間と協力して、一人ではできないような価値を生み出したい、という思いも常々持っていました。それが、今回のプロジェクトでかなったわけです。それも、総勢 18 名という大所帯です。研究をテーマにしておられる方や、教育に携わっておられる方、そして宗教的実践の現場で活躍しておられる方など、実に多彩な方々の輪に加わることができました。普段であれば、お目にかかる機会になかなか恵まれないこれらの方々と、会議等々などの機会を通じて頻繁にお会いして、交流を深めることができたのは誠に意義深く、貴重な経験でした。そうして人間関係が深まるのに比例して、「私だけでなく、この皆さんのためにも、何とかこのプロジェクトを成功させなくては」という思いが強まったと強く感じています。皆さま方、本当にありがとうございました。

科研費研究プロジェクトに参加しての感想

小林正樹(中央学術研究所)

今回の科研費研究プロジェクトでは、数量的研究班に所属した。数量的研究というものに対する経験の無かった私は、三年間のプロジェクトが終って初めて、数量的研究というものが辿る一連の流れを「自覚」した。おおまかな流れは一応、「知って」はいたが、自分の問題として「自覚」はしていなかったようだ。はっきり言って「遅すぎた」のであるが、これが現実であった。

数量的研究班における研究の流れの主なものは、①質問紙を作成し、②調査フィールドを確保し、③調査を行い、④分析可能なデータを集め、⑤数値化できるものについては適切に数値化し、⑥統計的処理が可能なデータセットを作成し、⑦統計的な計算や分析を行って、⑧何らかの結論を導き出し、⑨成果を報告する、という流れであった。これらは、私が気付いたものなので、漏れや誤りがあったらご容赦願いたい。とまかく、①～⑨のそれぞれの過程でさまざまな問題があり、そ

れぞれに大変であったが、全てを語ることはできないので、私が苦勞した部分について述べたいと思う。

とにかく、データは集まった…。私の場合、上記の流れで言えば、④までが終了した段階で立ち止まらざるを得なかった。統計的な分析に関しては全くの素人であったので、⑤～⑧のやり方を知らなかったからである。しかしながら、調査協力者に対し、何が分かったのかという報告をする義務がある。立ち止まっている訳にはいかない。

他宗教との比較など、興味を示しそうな分析の観点はある程度想像がつく。だが、このような観点の分析は、プロジェクトの公式報告書では限定的なようだ。各方面への配慮や紙面の制約もあるのだろう。しかし、内部向けの報告会などでは、求めに応じて臨機応変に分析を行い、どのような興味や関心にも応えられる自由度が必要だ。

もちろん、個別的、具体的な分析をプロジェクト

メンバーに依頼することは可能で、実際に、いくつかの分析をお願いもした。また、こちらの依頼を断るようなメンバーはいないことも十分承知している。しかし、メールのやり取りなどを通して、多忙な様子を伺い知ると、とてもお願いはできない。また、今日お願いして明日には分析ができ、解説まで付いているなどということは、ありえない。やはり、自分でやるしかない。

統計に対しては以前から苦手意識があったので逃げていたが、ようやく覚悟を決め、独学することにした。この決断もやや遅すぎた。プロジェクトも終了間際になってからは、本代を出すのは難しいとのことで、何冊もの統計関係書を自費で買った。実際の統計分析はコンピュータでやるのが分かったので、ソフトを買おうとしたが、値段の高さ(数十万円!)に驚き、一旦は諦めかけた。しかし、いろいろと調べているうちにリナックスのような無料ソフト「R」が公開されていることを知って、それを使うことにした。この段階になってようやく、⑤と⑥の内容について、具体的に知

ることができた。

⑦の統計的な計算や分析については、さまざまな手法があること、それらについて、さまざまな議論や賛否両論等があることを知った。例えば、一般的には必要とされる「分散性の検定」そのものも必要ないという議論があることを知った。統計分析の世界でも、決着のついていない問題がけっこうあるようだ。

最後に、今回気付いた点を指摘しておきたい。それは、⑥と⑦の詳細な公開がない限り、報告者の結論を検証することができないということだ。すなわち、聴衆は結論を信頼するしかなく、本当に間違いがないのかどうか、確認することができない。⑥のデータセットの中身、⑦における詳細(何という統計解析ソフトの、何という計算を、どのような手順で行ったのか等)についての報告が必要なのではないかと感じた。

いずれにせよ、多くのことを学ぶ機会に恵まれたことは事実である。プロジェクトに参加させていただいたことに心より感謝申し上げたい。

非常に濃い学びと成長の日々をふり返って

酒井克也(出雲大社和貴講社)

1. その意味と価値

夢のような3年が過ぎ去りました。本当に3年もたったのだろうか、実感が持てないまま、紙面をお借りしてふり返らせていただきます。まずは自分なりに感じた、この『科研費研究プロジェクト』の意味・価値という部分を語ってみたいと思います。

このプロジェクトに参加させていただく運びとなった時点では、今思えば、その価値を理解しておりませんでした。ただ「これは良い経験となる」という思いだけで飛びついたというのが、恥ずかしながら正直なところ。その価値を実感し始めたのは、予備調査の結果を踏まえ、本調査の準備が始まった2013年の7月頃からでした。この頃から、本調査用の質問項目が具体的、かつ非常にシビアに検討され始めました。使用する言葉は本当にこれが正しいのか？ 自分たちの企図

する通りに理解してもらえるのか？ 帰って来た結果は有益なものになるのか？ 回答者に不要なストレスや圧力を与えないのか？ 不足は無いのか？ 会議は毎回、白熱したものとなりました。

自分の限られたフィールドでは、これほど多岐にわたる質問紙を正確に答えていただくことは、100部に満たないほどでも至難の業でした。それを本調査で、合計で1万部にも達する質問紙を、日本中のご協力者に答えていただくということ！

この数字の「すごさ」に、会議が繰り返されるたびに、ひるむ思いでした。しかも、その中身が、中学生から中高年まで、一般の方から宗教関係者までに及ぶのですから、これはなんとしても「芳醇な成果」につなげなければ、罰が当たります。

そもそも、この科研費研究プロジェクトは、宗教心理学研究会が発足して約10年、メンバーの先

生方がコツコツと実績を積み上げ、地道に活動し続けてこられた集大成です。入会して数年目の私にとっては、AKB48 に例えると(これは、プロジェクト中のマイブームでした)、「デビューライブがいきなり東京ドーム」というぐらいの緊張がのしかかって来たことを、昨日のこのように覚えています。調査の現場でポカをしでかして、「あー、どうしよう!」と頭を抱える夢ばかりを見ていたのも、この頃です。

2. 叱られて、叱られて

とうとうやってしまった。しかも何回も。

分担当した仕事の内容の誤解、締め切り遅れ、報告・連絡・相談の不十分さ、いよいよ本調査が始動した矢先に、私の「ビビリ」が露見しました。特に仕事の内容を明確に理解しないままに進めてしまうのは、私の性格から来る悪い癖でした。これは通称「あさって」と言い、まったく別の方向を向いていて、理解していると思いこんでしまう私の性格を、端的にあらわすミスでした。考えてみれば、仮にも客観的・実証的な研究をすると宣言する人間である以上は、このような姿勢は致命的です。このことを指摘されたときには、本当に久しぶりに、穴があったら入りたい思いをしたものです。

しかし、今こうして振り返り思うことは、ただただ「有難い」の一言です。この歳(恥ずかしながら 50 代です)になりますと、研究姿勢だとか今後の危険性だとか、プライベートなことを真剣に心配していただいたり、助言していただいたりすることは、まずあり得ないのです。学生ならまだしも、こ

の歳ですから。それを、(もちろん、プロジェクトを成功させるためでもあります)真剣に、超多忙な中お時間を割いて話し合ってくださいました松島先生には、感謝の言葉ありません。今後の行動と結果で、恩返しをするつもりでおります。少々お待ち下さいませ。

3. これからの研究に向けて

今回、『神道の心理学的研究』に向けて、本格的なスタートを切らせていただいたわけですが、すでにこの 3 年の月日が、かけがえのない思い出となっていることに少々驚いております。ビビリまくりながら、調査先の各大学の学生さんたちに質問紙を配布したこと、暑い暑い夏の日、名古屋の南山大学に何度もお邪魔して、1 日中エラーチェックを続けたことなどが、遥か遠い昔の思い出のように想起されます。

思えば、封筒をカッターで開封する作業に関しては、誰にも負けないと思えるほど熟達しました。質問紙や分析などの肝腎なことは「まだまだ」ですが、その分エラーチェックなどの実務的な作業は、真剣に取り組みました。夕立の中、西脇先生の運転で駅まで送っていただいた車中、魂が半分抜けかかっていた松島先生が、「エラーチェックのような、一見地味な作業こそが調査研究の土台です。忘れないでくださいね」とつぶやかれました。あの日の光景とともに、私の座右の銘となっております。メンバーの先生方、ご協力いただいた皆様、本当に、本当に有難うございました。私は、この歳で少し成長いたしました。

プロジェクトでのご縁と私の学び

武田正文(浄土真宗本願寺派高善寺)

この 3 年間、プロジェクトに参加させて頂いたことで、宗教心理学と真剣に向き合い、その面白さと共に研究することの難しさも実感することができました。

私は、修士課程を修了して間もなく、このプロジェクトにお声掛けいただき、自分の力量の無さに不安を覚えながら参加することになりました。大学院時代は、宗教心理学を教えてくれる先生はおられず、臨床心理学を学びながら自己流でなんとなく仏教も併せて学んでおりました。今振り返ると、心理学と仏教が分離しており、まったく別のものを無理やりくっつけようと苦しんでいたように思います。

このプロジェクトでは、宗教心理学に関心を持つ方々と知り合えたことが何より貴重なご縁でした。専門分野も様々な方が集まっておられたこともあり、あるテーマについての考え方や研究方法も多様であり、宗教に対する多角的なアプローチが可能であることを目の前の先生方から教えて頂くことができました。

私は質的研究班に参加させて頂き、阪神淡路大震災から今に至るまでの体験を、僧侶や被災された方など様々な方のお話を伺いました。それぞれが、震災という悲惨な現実に向き合っておられました。そして、そのなかで宗教、仏教と自分がいかに関わってきたかというお話がありました。ご協力いただいた皆様の人生の重みを感じられる語りの一つひとつは、全てに深い意味があるように感じられました。

ところが、こうした貴重な語りを研究の土台に乗せようとする、途端にどのように向き合っよいか分らなくなってしまう。一般化について考えると、目の前の人の個別性が失われてしまうように感じ、個別性を記述しようとしても自分の表現力の無さから上手くまとめられないということが多くありました。研究をするという上では、とても基本的な課題なのかもしれません。し

かし、宗教それ自体が、全ての人に共通するにも関わらず、非常に主観的なものです。この点において、宗教を心理学的に、科学的に分析するということは非常に難しいことに思いました。

今回のプロジェクトでは、宗教宗派を超え、学問分野も超えた方々がお集まりでした。こうした多様な立場の方々が一つのプロジェクトを行うということ自体、非常に難しいことであろうと思います。もちろん代表である松島先生をはじめ、全ての先生方が様々なご苦勞を乗り越えての 3 年間であったと思っています。しかしながら、私は 3 年間で率直に振り返ってみますと、楽しかったということに尽きると感じております。立場は様々でしたが、共通する問題意識としては、人間の苦悩いかに向き合い、解決していくのか、というテーマはどの先生方もお持ちだったのではないのでしょうか。会議の場では、その共通する問題意識が感じられたからこそ、信仰する対象という枠組みを超えて、これからの社会を生きる人々のために、この研究が役に立てるよという一つの方向性のようなものがあつたように感じております。そして、この方向性のなかでは、とてもあたたかい雰囲気があり、自然と楽しいと感じていました。

私自身は僧侶としても心理学者としてもまだまだ未熟ではありますし、このプロジェクトでも多々足を引っ張るようなところもあつたように思います。しかし、3 年間を通して、バラバラだった私のアイデンティティが、まとまる道筋は見えてきたように感じております。宗教と心理学はそう簡単に答えが見つからないことを痛感していますが、私もライフワークとして、宗教心理学と向き合ったいという想いが固めることができた 3 年間でした。

たくさんの先生方と一緒にできたこと大変嬉しく思っております。本当にありがとうございました。

合掌

様々な宗教集団を比較することの大切さ

徳野崇行(駒澤大学:非会員)

研究代表者の松島公望先生にお声をかけて頂き、「宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連——苦難への対処に関する実証的研究」という科研費研究プロジェクトに参加させて頂いたことにまず御礼を申し上げます。

私が所属した数量的研究班では、本プロジェクトにおいて総サンプル数が 6620 にも及ぶ質問紙調査が実施されました。このような大規模調査によって貴重な研究成果が得られる一方、私個人としては、実際に大規模調査を行う手順や実務を事細かに学ぶことができました。例えば、メールや対面式の会議を使い分けた意思疎通のあり方、役割分担の仕方、情報や問題意識の共有化の具体的な方法など、場面や状況に即した臨機応変さが求められ、実際に研究プロジェクトを運営することの意味と困難さを直に見聞できたことは一生涯のかけがえのない貴重な経験となりました。こうしたプロジェクトに研究協力者として微力ながら関わることができたことをたいへん嬉しく思います。

科研費研究プロジェクトの三年間を振り返って、とくに印象的だったのは、数量的調査を行う前に行われた各教団の質問項目や属性項目を策定するために、何度も議論に議論を重ねたことです。鋭い批判を投げかけ合いながらの議論を通じて質問項目が徐々に錬磨され、研ぎ澄まされていくことを肌で感じることができました。この経験は今後自身が研究を進める中で、「問う」という基本的で重要な技術に幅をもたせてくれるものとなりました。

これまでの調査項目を参考にしつつ、その結果を咀嚼しながら、一つ一つの質問項目を丹念に磨きだしていくことはひとえに地道な努力の賜物であり、調査対象者の考えを的確に捉えるため、そして今後の調査において継続的に活用できるようにするために、質問項目に真贋に向き合う姿は感銘を受けるものでした。

例えば、宗教イメージ尺度では、「組織的—個

人的」「軽薄—重厚」「役に立つ—役に立たない」という三つの尺度を用いて、祈りや坐禅、仏教やスピリチュアリティなどの宗教行動や宗教概念などに関わる 14 項目をたずねています。しかし、議論の過程の中では、「自己啓発セミナー」「古い師養成学校」なども候補として挙げられており、どの質問項目が適切か繰り返し議論を重ねました。

また各宗教集団の宗教的な体験を捉えるため、キリスト教の「洗礼」と仏教の「授戒」、あるいはキリスト教の「救いの体験」や神道の「ご神徳」などが質問項目となっておりますが、こうした様々な宗教集団において比較可能な共通項とは何かという問いは、宗教学においても重要な問いかけであると感じました。

五件法の質問項目ではない自由記述の分析方法に触れることができたこともたいへん勉強になりました。西脇良先生が中心となって検討を進めた宗教的自然観をめぐる自由記述形式の設問設計や分析について学べたことは、普段、質的な研究に軸足を置いている私としては非常に興味深いものでした。このような調査のアプローチをあまり意識してきませんでしたので、数量的調査の中で回答者の質的な部分を分析するアプローチを学べたことは、これから自身がフィールドワークを行う上でも参考になりました。

私は日本仏教の民俗宗教的な展開、とりわけ死者供養の文化を研究テーマとしており、歴史研究だけでなく、霊場寺院などのフィールドワークを通じて供養の現代的展開を研究しています。以上のように、本プロジェクトは、私が研究対象としている曹洞宗だけでなく、神道、カトリック、プロテスタントなどに関わる宗教体験や宗教観を考え、視野を広げる大きなきっかけを与えてくれるものでした。このような契機を与えてくれた本プロジェクトの諸先生方に篤く御礼申し上げます。ありがとうございました。

科研費研究プロジェクトの 3 年間の活動を終えて —失敗からの「学び」と「成長」—

中尾将大(大阪大谷大学)

筆者は 2015 年 3 月末まで、科研費研究プロジェクト「宗教性/スピリチュアリティと精神的健康との関連—苦難への対処に関する実証的研究—」に研究協力者として参加した。正直、当初はプロジェクトへ参加することをためらったのだが、「宗教心理学」という名称を前面に押し出し、なおかつ国が認めたという大きなプロジェクトにはなかなか参加できるものはないと考え直し、参加を決めた。プロジェクト開始当初は立場上「お手伝い」程度の仕事を担うものと思っていたが、いきなり、最初の会議で数量的研究班班長を任せられたりし、正直戸惑うことが多かった。筆者はこのような大きなプロジェクトに参加したこともなく、まして組織運営とはどのようなものかもさっぱりわからない状態であった。そのような人間がチームの取りまとめなど当然できるはずもなく、開始当初は何もわからないまま目の前の仕事をこなすことだけで精一杯な状態だった(振り返ってみると、仕事をこなせていたかどうかも定かではないが・・)。

ただ、プロジェクトの進行に伴ってストレスを感じたり、仕事上の失敗を繰り返してはいたが、その 1 つ 1 つの経験が確実に筆者にとって肥やしとなっていたことも事実であった。研究代表者をはじめ、参加された多くの分野を超えた先生方から貴重な示唆を頂いたり、叱咤激励を頂戴してきた中でこれまで経験したことのなかったチームでの研究、組織の運営など、知見を広めることが出来たように思っている。

なかなか各分野の専門家が叡智を結集して 1 つの仕事を進めてゆくことはとても難しいことであったと思う。例えば、筆者の専門である心理学では当たり前のことが宗教学ではそうではなかったり、心理学者が気にも留めないことが他の分野ではとても大事な点であったりしてと、なかなかチーム内でひとつの仕事についてのコンセンサスをとることも大変であったことも事実であった。

ときには議論がエキサイトし、険悪なムードと

なり、会議の進行が中断してしまったこともあった。しかし、分野を超えてひとつのテーマに取り組もうとするメンバーの「情熱」が、我々を鼓舞し、再び結束を促していったように思う。気がついたら、(表現が適切かどうかわからぬが)チームの結束が太く、強くなり、お互いが「戦友」のような繋がりが人間関係の上で築かれていったと思っている。

プロジェクト進行の過程で生じた数々の困難を乗り越えて、我々は戦う集団へと確実に成長していったと思う。多くの調査データを得たとともに、メンバーひとりひとりがプロジェクトにおける活動を通じていわば、「人間としての成長」を遂げていったのではないだろうか。プロジェクトの 3 年の間にあまりにも多くのことが起こり、わずかの紙面でその全てを述べることはできないが、チームは数々の失敗から学び、人間として、研究者としてひと回りもふた回りも成長していったということは自信を持って言えることだと自負している。

今後また、何らかの形でこのようなプロジェクトが始動することがあるかもしれないが、プロジェクトのメンバーひとりひとりが痛みを耐えて前に前進しようとする強靱な精神力と研究に対する熱い情熱を維持することができれば、きっとプロジェクトはいい方向へと導いてゆかれるに違いないと確信している。それは筆者が今回のプロジェクト通じて学んだことであった。

また、プロジェクトを通して感じたことだが、混沌極める現代、宗教心理学という研究分野は今後も注目を浴びてゆくことになってゆくことだろうが、研究の道程は決して平坦なものではないと思う。この分野を開拓するためには先に述べた「痛みを耐えて前に前進しようとする強靱な精神力」と「研究に対する熱い情熱」という 2 つの精神活動が研究者に求められてくると思えてならない。プロジェクトを終えたとき、筆者の中では、宗教心理学という分野の色彩はより一層重く、深いものとなってしまった。筆者も含め、研究者は余

程の覚悟を持って宗教心理学と対峙しなければ、テーマの重厚さ故に研究者は押し潰されかねなくなり、宗教心理学の未来は見えてこないのかもしれない……。これも表現が適切か皆目自信はないが、筆者は宗教心理学の中にあつた「パンドラの箱」をそつと開けてしまったように思ってい

る……。

筆者の宗教心理学に対する印象と研究姿勢を大きく変えてしまったこともプロジェクトに参加して得られた副産物と言えるのかもしれない。自他共に実り多きプロジェクトに参加させてもらったことに今は深く感謝している。

感謝のひとつ

西脇 良(南山大学)

この度の科研費研究プロジェクトを振り返るにあたり、このような私をプロジェクトのメンバーとして迎え入れてくださったメンバーの皆さん一人ひとりに、またとくに、このプロジェクトを成功へと導いてくださった研究代表者である松島公望先生に、深く感謝を申し上げます。この 10 年余り仕事上での変化とはいえ研究生活が疎かになりがちな私が、こうして未だ研究会のメンバーであり続けていられるのも、研究プロジェクトのメンバーの皆さんの熱心な議論や研究活動に鼓舞されているからに他なりません。この場をお借りして、あらためて深く御礼を申し上げる次第です。

私自身、プロジェクトでは「数量的研究班」に属し、質問紙調査の項目検討、実施、分析を担当いたしました。本調査の段階では、利便性の良さから、名古屋市内にある私の勤務校をしばしば作業所として提供させていただきました。数千にのぼる調査票の点検やエラーチェック作業には膨大な時間と労力がかかりましたが、メンバー同士よく協力し合い、また大学生らの強力なお手伝いもいただきながら、効率良く、また楽しく進めることが出来たように思います。

少し横道に逸れますが、研究テーマに関して机上で議論するにせよ、実際に調査票を手にし、整理したりエラーチェック作業をすすめていくにせよ、それらのやりとりの中で、何とはなしに個々のメンバーの「人となり」が見えてくるものです。そのような人となりの部分に対して自分の心が閉じてしまうのではなく、「開かれていく」とときには、必ず自分自身に対しても開かれていく、と思いま

す。つまり、他者に対して開かれるとは自己に対して開かれるということだ、と。この他者に対するオープンな在り方は、じつは研究をすすめる上でとても重要ではないかと思えます。研究を開始する上で大切なのは着想とかアイデアといったものだと考えますが、「あなたのアイデア、とてもいいね。」「その着想、すごいなあ。」というように、相手の着想やアイデアに対していつも開かれた姿勢でいると、それが自分にも良いかたちで跳ね返ってきて、自分自身、新しいオリジナルの着想に行き当たる、ということが起こりうる、と思えます。つまり自分に対しても開かれていくわけです。今回のプロジェクトではチームとして行動する場面が多かったため、そのぶん、この点を意識する良い機会ともなりました。

私自身の研究関心から申し上げますと、質問紙の中に「宗教的自然観」をテーマとする設問を加えていただくことで最新の実証データを多数得られたことが、何よりの収穫でした。分析はまだ途中の段階ですが、年齢も宗教的な背景も大きく異なる回答者のデータが揃っていますので、新しい知見が得られることを期待しています。またこの機会に、10 年ほど前にまとめた「自然観コード表」(自然体験の記述を分類したもの)を改訂することも考えています。

今回の研究プロジェクトに参加させていただく中であらためて考えさせられたのは、「宗教性」概念をめぐる事柄でした。日本の文化に特徴的であるとされる「無宗教」性については、思索レベルでも種々に語られることが多くなりましたが(最近では例えば、島田裕己著『無宗教こそ日本人

の宗教である』、ネルケ無方著『日本人に「宗教」は要らない』など)、実証的な研究となると、これからの課題だろうと思います。その際、島田氏やネルケ氏のように、従来の「宗教性」(religiosity)に対応する積極的な概念として「無宗教性」(non-religiosity)を提案していく、というのも一つの道であろうと思います。また、「宗教性」と「スピリチュアリティ」の両概念を心理学的にどう区別し説明していくのかについても、私自身勉強不足であり、今後の課題として残され

ています。

さいごに、繰り返しになりますが、このプロジェクトへのお誘いをいただいたこと、一緒に議論したり作業したりすることが出来たことを、重ねて御礼申し上げたいと思います。この三年間の貴重な経験を活かし、これからも地道に研究を進めていきたいと考えています。さらに、研究会の他のメンバーの皆さまとの交流も重ねていくことが出来たら、と思います。今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

事務局からのお知らせ

宗教心理学研究会ニューズレター第 23 号が発行されました。今回ニューズレターでは、「科研費研究プロジェクトの 3 年間の活動を終えて」との特集を組みました。ニューズレター第 18 号にて「科研費研究プロジェクトから思い描く宗教心理学の未来」との特集を組み、研究プロジェクト開始にあたっての思いをメンバーに執筆してもらいました。第 23 号と第 18 号の両方の記事を読み比べてみるのも良いかもしれません。メンバーの 3 年間の苦労や経験の大きさが伝わってくるようにも思いました。

ニューズレターを始め、これからも研究会に対する会員の皆さまからのご意見、ご感想をお待ちしております。(K.M)

[宗教心理学研究会の今後の予定]

2015 年 10 月 24 日(土)

第 6 回研究会 報告者: クリーグ波奈 (東京大学)

2015 年 11 月中旬頃

関西地区勉強会 (輪読会) 開催予定

発行: 宗教心理学研究会

編集: 宗教心理学研究会事務局

研究会事務局

担当: 松島公望 [psychology-religion@office.so-net.ne.jp]

研究会ホームページ管理・運営

担当: クリーグ波奈 [psych.religion.web@gmail.com]

研究会ホームページ

http://www.geocities.jp/psychology_of_religion_japan/